

論壇

荒れそつな「目先の経済」

2019年はどんな年になるのだろうか。

よく言われることだが、足元だけ見ていると悲観的になり、方向を見失うことになる。長期的な視野で見ることが必要で、それによって初めて前向きな視野が開けるものだ。これからの経済や社会を見るに当たっても、長期的な視野が求められる。

目先の経済を見ると、今年は荒れそつな雰囲気だ。昨年末の世界的な株の大暴落とその後の動きは、世界経済の脆弱性をさらけ出しているように見える。10月に予定されている消費税の引き上げ

伊藤 元重

学習院大教授(国際経済学)

で、日本国内の需要が落ち込む懸念を示す人も少なくない。出口の見えない米中貿易戦争は、日本経済にも大きな影響を及ぼしそうだ。米中間の確執は貿易問題を超えて米中の覇権争いに及ぶものであり、短期間に集結するものではない。

このように足元の動きを並べて

楽観的長期ビジョンを描け

見ると、明るい展望を描くのは難しいように見える。ただ、そうした足元の動きに振り回されても仕方のないことだ。そもそも、多くの人が悲観的な見方をすれば、それだけで経済は悪くなってしまう。「景気は気から」であるのだ。

フランスの思想家のアランは、

「悲観は感情から生まれるものであり、楽観は意思で作るものだ」というようなことを言っている。足元の動きで感情的に悲観主義になるのではなく、将来を展望した楽観的なビジョンを描かなくてはいけない。

反面教師の保護主義政策

二つ目は、デジタル・トランスフォーメーションと呼ばれる、技術によって社会を変えていく力だ。大きく動いているデジタル技術を利用することで、足元の不安を払拭するような展開が見通せるはずである。例えば高齢者社会ではロボットや人工知能は大きな助けになるはずだ。

そして三つ目は、グローバル化への取り組みである。足元では世界的に保護主義の動きが拡大している。グローバル化が政治によって破壊する姿を見ることが、あらためて好ましい形のグローバル化を考える良い機会が提供されることになった。自由な貿易や投資は空気のようなもので、それが与えられている時にはそのありがたみは分かりにくい。しかしそれがいったん失われると、その重要性が身にしみる。トランプ大統領が始めた保護主義政策にはそうした反面教師としての教育効果がある。

貿易戦争を繰り返している米国と中国を除いた形で、TPPが成立し、そして日EU経済連携協定も実現間近だ。米中を外すという意味ではないが、この2国以外の地域と広範囲の自由化を実現し、それを足がかりに日本にとって好ましい形のグローバル化を進めていく好機でもある。

持続的社会的構築も、働き方改革も、デジタル技術への対応も、そして経済連携協定も、日本がこれまで進めてきたことだ。厳しい年であるからこそ、こうした取り組みを強化して、明るい展望に繋げていきたい年でもある。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。